

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成21年6月号

平成二十一年六月一日発行 第十九卷第六号 通卷第二一六号 (毎月一回一日発行)  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



法<sup>ほっ</sup>界<sup>かい</sup>定<sup>ぢやう</sup>印<sup>いん</sup>

高橋将夫

菱餅の形にもなる心かな  
大石忌万事ぬかりはなかりけり  
草餅の焦げ目や妻に逆らはず  
妹を椿とすれば姉は梅

鬼天狗河童もゐたる春の夜

獅子座より吹きくる春の夜風かな

穴出でしばかりの蛇の虚心かな

春風を吸ひ込みて邪気吐きにけり

金色の布袋黄檗山の春

朧月法界定印結跏趺坐

春星のきらめく五相成身観

# 槐安集

水野恒彦

雛段は原罪のいろかがよ赫へり  
春雷や梁の上なる父の闇  
朧夜を戻り来生家消えてをり  
さまよへる眼がふたつ朧月  
木瓜咲くや一白は吾が生まれ星

延広禎一

花に酔ひこの世に酔うてひよつとこに  
櫻隠しの雪に触れをる金剛杵  
死者の書を繰つてゐたりき海市立つ  
亀鳴くは鍾乳洞の雫かな  
横笛のうぐひすと化す高野かな

横笛は瀬戸入道の人



加藤みき

永日や歩きまはりし足のあり  
軍鶏の尾羽絹布はみ出す春の昼  
ドロップの缶の内なる春の闇  
葱の花天使は羽根を休めをり  
稚の菓子分けて貰ふや花の冷

石脇みはる

泥の中蝌蚪の紐ごと動きけり  
桃の花真偽の程は知らざりし  
公魚の苦味よかりし兼好忌  
やりとりの話はすみし土筆かな  
これまでの道程を経しさくらかな

岡井節子先生「新鹿の子」

## 中島陽華

花びらを鞠となしてや新鹿の子  
春闈けりサルトル劇に連れ立ちて  
つくしんぼ石の碁盤に日当りて  
直越えの海のひろがり萋の花  
ペンギンの同行二人春の雪

## 竹内悦子

能面に裏の顔あり春の泥  
がまずみの芽吹きとなりし菩薩かな  
櫻鯛とうとうたらりとうたらり  
春月やカレーライスとナプキンと  
蛇穴を出でて入りたる朱雀門

## 栗栖恵通子

釣針に返しありける余寒かな  
貝櫓らせんの紐のありにけり  
佐保姫の出でし手鏡裏返す  
曼荼羅やつくし囲みの無縁塚  
袴取る長門の国のつくづくし

## 大島翠木

白魚のまなこの黒さ歎異抄  
うかれ猫真言宗の塀の上  
春のたかなべートーヴェンの漂うて  
花満開掴みどころや鍋の蓋  
虚子忌たり雲の中なる鳶の笛

雨村敏子

閑谷や山べの梅の紅梅を  
あたらしき閑伽照つてをる桃の花  
雛の夜ちがふ貌してまじりける  
有漏有漏と醒めてをりけり櫻の夜  
膜一枚のあはひにありし朧なり

小形さとる

ものごころつきたる歩幅花あんず  
猫置いてまた芹摘みに行んだら  
よう来たると手籠に蕨入れながら  
春の土手行くまんまんの下心  
蕪畑の奥へひと声かけていく

本多俊子

土ひいな魂たましずしずと存へる  
春昼の真ん中にゐて犀の角  
行く人の花に呼吸を合はせけり  
くちなはの動き出したり千字文  
古文書の謎めいてをり霾ぐもり

久津見風牛

春耕の鋤掛けしをり父として  
人を生む谷あり木肌春兆し  
御下がりの服を着込むや巢立鳥  
ひとつとやひと畝ふやす芋の列  
逝くと言ふ不思議まんさく匂ふかな

近藤 きくえ

寄せ書きに胸熱くをり梅ひらく  
弥陀の涙か白梅のひとしづく  
星砂とガラスの器 春の宵  
春風や法堂天井双龍図  
はくれんの妖精の舞ふ宵なりし

近藤 喜子

茅花野のきらめき音となりにけり  
春蘭や山霊ひそやかに添ひぬ  
涅槃西風まとふや父と母のこと  
雲雀野や少女の我に会ひに來し  
人の灯のけばけばしさに亀鳴けり

谷村 幸子

大きな蕪引きし劇みて浅き春  
蜷の道真竹の影の揺れてをり  
方位石の真中に立てり柳絮とぶ  
話しつつ土筆の袴むいてをり  
堅香子の花によばれて丸木橋



# 槐市集

朝日正人

空海忌水吹き上ぐる風の谷  
穂の芽の割れ韋駄天の走りかな  
棹秤梅の蕾に鳥来たる  
虫塚合掌啓蟄乃金剛身  
探梅や久米仙人の掌

犬塚芳子

山の気を歩きつづけて諸葛菜  
晴れ渡る日や正直にチューリップ  
そそくさとどかと坐りぬ彼岸婆  
花杏仏足石を明るうす  
夕星や菜花まささをに茹である

犬塚李里子

桜草嘘でもいいのやさしさを  
桜東風道にころがる竹箒  
風船のおのづと空へ老ひし人  
藁や日当る部屋に鶴を折る  
おぼる夜のおぼる飲み干す食前酒

井上静子

ふるさとの人疎らなり柿若葉  
ものの芽の濡れてあしたの眩しめり  
献血のバスのうしろに牡丹の芽  
桃の日や器用に巻きしいくら寿司  
笹鳴のしかと聞こえし山の晴





# 槐集

## 高橋将夫選

松明の雫を拾ふお水取 撰津 中田 禎子

ひと巻の豚のしつぽや春うらら

風神の破れ袋なり黄沙ふる

アーモンドの花楼蘭のミイラかな

紐解きてあらしいとうの匂やかに

魚心ありて魚氷に上るかな 守口 柳川 晋

強情は泪となりし目刺嚙む

祝と呪じゆはそも姉妹あねいもつと 彼岸道

修二会果て天下泰平河童の屈

拍手を打つここよりは花鎮め

曖昧な二月の過ぎて何と言ふ 東京 西村 純太

天心に月魂とどむ余寒かな

空海の偽筆もよけれ彼岸潮

春月の笑うたやうな大癒見

西行の蹤跡なくば花虚空

救世観音の御座より春の風起てり 枚方 富松 寛子

跳び越ゆる青き銀河やいぬふぐり

胸奥の大阿蘇の野火濃かりけり

肋骨をやさしく打てり涅槃西風

くれなゐの姿うつくし莖立てり

子さらひのやつて来るなり春一番 安城 近藤 公子

涅槃図に漂ふ言葉ありにけり

山葵沢胸冷やしたる色なりし

大皿の一枚は花の山なりし

笛方の白き眉毛や蟬丸忌

送られし鶉の瀬の水や奈良の春 京都 竹中 一花

掛け巻くも神代に続く梅の道

霞より抜け来し猫と生活くらしをり

梅の空きりきりりと竹とんぼ

天地のつぶやき春を告げにけり

# 銀河往来 高橋将夫

風神の破れ袋なり黄沙ふる 中田 禎子  
この頃、有害物質を含んだ黄沙が問題になっていて、黄沙の詩情も汚れつつある。それはともかく、風神が風を吹かせる袋が破れて黄沙が飛び散ったという発想に脱帽。俳諧。

「選の基準」として、「①景が簡明②深さ、広がり、不思議さ③新鮮さ、オリジナルティ」を挙げているが、③については、作者ならではの視点を大切にしたいということである。俳句はものを言わない文芸だと言われる。しかし、言うべきものがあったり内に秘めるのならよいが、初めからなにもない句ではつまらないと思う。その意味で、作者の五句はそれぞれ作者ならではの視点が見え、大いに共鳴した。

例えば、〈松明の雫を拾ふお水取〉では、松明の火の粉を雫と見た視点、〈ひと巻の豚のしつぽや春うらら〉では、「豚のしつぽのひと巻」への着眼、〈アーモンドの花と楼蘭のミイラの取合せの妙、といった具合である。

魚 心ありて魚氷に上るかな 柳川 晋  
「魚氷に上る」は氷の割れ目から魚が躍り出て氷に上るという早春の季語。別に魚心があつて氷に上るわけではなからうが、もし魚心があるなら水心もありそう。「魚心あれば水心」は通俗な慣用語。一方、「魚氷に上る」は古典的な季語。この二つが融合して不思議な世界ができたと感じさせられた。

春月の笑うたやうな大癡見 西村 純太  
癡見（べしみ）は口角に力を入れて両唇を強く結んだ異形の能面。もし、両唇を強く結んだ癡見が口を開けて笑ったら、はたしてどんな形相になるのだろうか。想像しただけで吹き出したくなるが、「春月が笑ったような」とはよく言ったものだ。

救世観音の御座より春の風起てり 富松 寛子  
救世観音は世間の苦をよく救う観世音菩薩。今、吹いてきた春風はその御座からの風だという。吉兆である。めでたい。願いであり、祈りである。こういう句が心に湧いてくる作者の精神の位相に心を打たれた。

涅槃図に漂ふ言葉ありにけり 近藤 公子  
涅槃図を眺めていると、静寂の中から釈迦の教えが聞こえてくるようだ。涅槃の釈迦と、それをとりまく弟子たちも描かれているのだらう。沈黙の世界だが、釈迦への思いを語りあう弟子たちの声も聞こえてきそうだ。「言葉が周辺に漂っている」という感じがよく伝わってくる。

掛け巻くも神代に続く梅の道 竹中 一花  
かけまくもかしこみ、かしこみ申す：まるで神前にいる気分。作者が行く梅の道は、いかにもそんな祝詞が聞こえてきそうな道で、このまま行けば、神代にまで行きそう、そんな道だったという。めでたい。

(以下略)